

坂田教育長からのメッセージ (031021)

10月16日土曜日は「清瀬教育の日」。市内の小中学校では午前中授業が行われていた。教育の日のイベントとして、数年前からビブリオバトルが開催され、この日の午後も清瀬高校会議室を会場として、「清瀬教育の日【ビブリオフォーラム】」が開催された。

当日、第1部では、清瀬市内の小学生1名と本校1年福田芽生さんが本を紹介。第2部では、市内の各中学校から選ばれた7名の中学生がそれぞれお気に入りの本を紹介してくれた。福田芽生さんが紹介した本は「奇譚ルーム」。福田さんは来月開催される東京都教育委員会主催のビブリオバトルに出場予定である。

昨日、坂田教育長からコメントをまとめたメールマガジン（毎週発行）が私のもとに届いた。

今週ちょっと気になったことをつぶやく…

新生! 400字のメッセージ

子供が育つ 市民が育つ まちも育つ 清瀬の教育

令和3年10月15日発行（第19号）

毎週金曜日発行予定

発行者：教育長 坂田 篤

教育委員会 HP QRコード



今回は発行を意図的に遅らせました。その理由は16日（土）に「ビブリオフォーラム」が行われたから。本を通して感じ、考えたこと、想像したこと、価値観が揺さぶられたこと、主人公から教えてもらったこと、登場人物を通して夢を持ったり希望を抱いたりしたこと…。これらを堂々と語る子供たちの姿を、感激と興奮冷めやらぬうちに伝えたかったからです。



会場となった都立清瀬高校の会議室は、最初の登壇者である清瀬小学校6年依田さんの書評が始まった途端「沈黙の称賛」に包まれたようでした。書評した本は「りゅうがあります」。最初の発表者ということで緊張していたことと思いますが、原稿に目を落とすことは一切なく、胸を張って本の魅力を語り掛けてくれました。

「ズボンのポケットの穴に指を突っ込んでしまう…」など、「私が思わずやっちゃうこと」を紹介しつつ、あらゆる物事には Why（理由）があるんだ…、といった「この本を通した依田さんの気づき」を語ってくれました（ちなみにポケットの穴に指を突っ込む理由は「寂しい膝小僧に話しかけてあげるため」だそうです。素敵

Why です)。

ほとんどの人は「眼に見える出来事」だけで判断し行動します。例えば A さんが遅刻をした。先生は「遅刻はいけません！」と注意をする。他のクラスメイトも「そうだ！そうだ！」と A さんを責め立てる。

確かに遅刻はいけない。しかしもしも A さんが登校中に道に迷っていたお年寄りを目的地まで連れて行ってあげたから、登校時間に間に合わなかったのだとしたらどうでしょう。その瞬間「時間を守れないだらしない A さん」が、「困っている人の立場に立って行動できる優しい優しく勇気ある A さん」となるのです。

「なぜ？ (=理由、Why)」を見つめることは、目を見開いて見えないものを見ようとするこ
と、耳をそばだてて聞こえない声を聞こうとすることに他なりません。これこそが本当の人とし
ての「優しさ」です。依田さんはこの本を通して私たちに伝えてくれたのです。

次の登壇者は清瀬高校 1 年生の福田さん。紹介してくれた本は「奇譚ルーム」。残念なことに、私はこの本を手にしたことはなかったけれど、福田さんのプレゼンを聞いて、思い出した本があります。それは「千夜一夜物語」。私がこの本と出会うきっかけを作ってくれたのは何を隠そう「音楽」。リムスキーコルサコフというロシアの作曲家が書いた「シェヘラザード」という管弦楽曲です。あたかも古代アラビアの壮大な絵巻物を見るような音楽で、思わず本を手にとって(英語版も読もうと思ったが挫折)一気に読み切り、その後ディズニーの映画や手塚マンガへという、多くの人たちとは全く異なるプロセスを踏み、あらゆる表現手段でかかわった、私にとって大切な物語です。



横道にそれてしまいました。福田さんのプレゼンは「さすが高校生！」の一言に尽きます。優れた「朗読劇」「一人芝居」を鑑賞しているような「世界観」を感じるものでした。恐らく彼女の「世界観」を支配するキーワードは「他者意識」。「楽しんで私の話を聞いてもらうには、どう表現すればよいだろう…」「私が聞く立場だったら、こんな工夫をすればこの本に興味を持つだろう…」「ここを強調すれば、聞く人の心に残ってくれるだろう…」とギャラリーの立場に立って考え、声のトーンや強弱、速度、そして表情まで変化させてプレゼンしてくれたのです。

「主語が『I』から『You』、『You』から『We』へと変化したときに、人は本当の成長を迎える」と言われます。まさに福田さんは主語を『You』において考え、想いを届けてくれたのです。「発信のスキル」だけでなく、「人と人とのかわり方」においても、福田さんは小中学生の手本、モデルになってくれたのです。

三番目の登場は清瀬中学校2年生の宮田君。プレゼン前から彼のことは気になっていました。



それは大きな声で、元気に「挨拶」ができる生徒だからです。(株)ワタミグループの社長である渡邊美樹氏は講演でこう言っていました。「あいさつからすべてが始まる。あいさつは相手の心の扉を開く。そうすると世界が広がり幸せがやってくる」。

「こんな挨拶を元気に交わせる宮田君は、どうやって自分を本の世界に引き込んでくれるのだろう…」。彼一押しの本である「下町ロケット」のプ

レゼンは期待にそぐわぬものでした。先ず言葉に力があること。聴く側に元気が「伝播」するようです。そして「おすすめポイント」を三点にまとめて語るなど、論が整理されていること。宮田君の「頭の中」「心の内」が明確に伝わります。最後に「本が好き」「池井戸潤が好き」「下町ロケットが好き」という想いが言葉の端々、表情の一つ一つに現れていること。私も思わず「もう一度読んでみようかな…」と思うほど。

江戸時代の我が国の識字率は世界に冠たるものだったようです。鎖国を解いたペリーは、記録にこう書き残してあります。「下田でも函館でも書物は店頭で見受けられた。人民が一般に読み方を教えられていて、見聞を得るのに熱心だからである」。

しかし「読書離れ」が進んで、今や国民の二人に一人が「一か月に一冊も本を読まない」状況になってしまいました。ある調査では読書離れの原因の第一位に「読書が辛いから」が上げられています。過去、勉強の延長として読書を「やらされた」ことがトラウマになっているといえます。

こんな「読書が辛い」と感じている人に、宮田君のプレゼンを聞かせたい…。ストーリーに身を委ね次の展開にワクワクドキドキした想いを「読書をやらされた」と感じている人たちに伝えてほしい…。読書に対して閉じてしまっている人たちの心を、宮田君の元気な挨拶と言葉の力で開いてほしい…。いつか行動に起こしてくれませんか？ 期待が大きいと要求も高くなるのです。

————— (以降次号に続く) —————

「よき書物を読むことは、過去の優れた人たちと会話するようなものである」(デカルト)。「今日の読書こそ真の学問である」(吉田松陰)。「本がなければ生きられない」(ジェファーソン)…。読書の魅力を語る言葉は古今東西数多あります。

しかしどんな著名人の言葉よりも、この日の9名の子供たちの発信、そして想いや願いに勝るものはありません。間違いなく彼らは本の、読書の魅力を世の中に広める「インフルエンサー」そのものでした。